兵庫生物 11 (5)：275－278，1999

オリノコデルタ・ギアナ高地紀行

大　賀　二　郎

はじめに

1997年9月17日から仝9月29日まで，ベネズエラ国オリノコデルタおよびギアナ高地を旅行した。

主目的は，次の各項の観察と写真撮影を予定していた。

1．オリノコデルタの自然と生物相
2．同地域の原住民の生活
3．ジャングルウォークの体験
4．ギアナ高地の自然と生物相
5．エンジェル瀑布周辺の自然と生物相

行程は，つぎのとおりであった。

ニューヨークを一路南下，フロリダ上空から紺碧のメキシコ湾を通過，南米大陸に入るとすぐにカラカス。ベネズエラの首都で，陽光輝く近代都市である。ここからオリノコデルタの町プエルトオルダスへ。河畔にぎっしり茂ったジャングルの間をクルージングした後，次の目的地に飛ぶ。ラスクラリタスを経て，ギアナ高地探索の前線基地サンタエレナに着く。

オリノコデルタ

オリノコ河は，アマゾン川とならぶ大河で，全長2,060km，流域面積944,000㎢で河口は大三角州で大型汽船の航行も可能である。無数の支流域は熱帯降雨林に覆われ，多様な生物相が形成された。

私たち一行は自然観察，民族，写真などに関心をもつ者16名で構成されている。秘境・山岳ツァーが専門の旅行社が企画した。カラカス正午発の航空便でオリノコデルタへ。ここからフェリー，自動車およびボートを乗り継ぎ河岸のボアデティグレキャンプへ。掘立小屋風の施設である。ここを基地として，カヌーで付近の探索が始まる。周囲はうっそうとしたジャングルで，行動日以外はハンモックで午睡，目が覚めれば魚釣り，小屋の横でいくらでもかかるが，シャベルノーズなどのナマズの仲間ばかり。かたはらでハゲコウが行儀よく待っていて，おこぼれを頂戴する。

ピラニアは個体数がきわめて多いが，普遍的に生息しているわけでない。主に入江と本流の出合のあたりで群遊している。ピラニア釣りはこのポイントを外せば全くかからない。貪欲だが，意外と敏捷。牛肉の餌をがっちり鉤に留めていても取られることが多い。ピラニアを釣り上げたときはきわめて危険，カミソリのような歯で指を切られることもあるという。

水辺の叢にはサンゴヘビがいる。赤，黒，白の横縞が鮮烈，見るからに毒々しく，事実猛毒を持つ。しかし被害は意外に少ないという。姿に反し臆病で口が小さい。

その他敷地内の湿地には，コノハヒキガエル，アマガエルの各種，注意すべきは体調20cmのオオムカデが普通にいることだ。

ジャガーの仔がキャンプで飼育されていて，愛嬌をふりまいている。よく馴れているが精悍，鎖につながれているが，人が近づくと跳び上がって腕に抱きつく。まだ伸びきっていない歯と爪でも，はずすのが大変だった。

オリノコ河の落日はまさに荘厳そのもの。向岸の椰子の林がシルエットになり，水面が黄金にきらめく。そしてまたたく間に暗闇になる。蛍の夢幻の点滅。日本の種のようにあまり翔ぶことがなく，主に叢で遠くの仲間とのシグナルを交わしている。大きさはヘイケボタルより小さいが，光は強烈である。100m先のものでも識別できる。

小屋にはネットがあって蚊は入らないが，夜一歩外に出ると大群に襲われる。マラリアの媒体ハマダラカは見かけなかったが，イエカが音もなく寄ってくる。日本のものより小型でかゆみも強くない。困るのはブヨ。これは腕に粉のように付く。掌で拭き取る。

たくさんの蝶・蛾が光を求めてやってくる。関心があれば素晴らしい収穫となろう。壁にモルフォ蝶もいた。

夜明け，ジャングルの方向から不気味な吼声で起こされた。場所が場所だけに，すわ食人種の来襲かと，一瞬緊張する。ガイドが廻ってきて笑いながら説明した。ホエザルが毎朝テリトリーを確保するための威嚇だそうだ。

早朝からジャングルウォークに出かける。腰まで届く長靴とジャンパー，出かけないうちに汗でびっしょり。カヌーで上流を目指すこと一時間。とある入江の中に進む。水路は更に迷路のように分かれている。巨木にツタ，カヅラがからみつき，光が糸のように降り注ぐ薄明の世界だ。腐敗した茶褐色の水面，幾層もの堆積物。泥沼の中を足を取られながら歩む。こんなところで迷子になればとても帰れないだろう。毒蛇は言うに及ばず，蟻も恐ろしい。樹幹に大きなコブを造っているが，誤って手を触れれば大変，いつの間にか蟻の別行動隊が足許からかけ上ってくる。小さいが大群が蟻酸を持って攻撃してくる。ただ事ではすまない。　釜風呂のような熱気，湿度，メタンガス様の異臭，ツルと棘，毒虫毒蛇の恐怖，しか

しおびただしい生物たちはどこに隠れているのだろう。暗闇の中から，いくつかの目が私たちを見つめているに違いない。

帰路，ワラオ族の集落を訪問する。ガイドから幾つかの注意があった。なぜか煙草は厳禁とのことである。水上家屋が河岸に沿って立ち並ぶ。一行がカヌーで近づくと，全村民が立って見つめている。歓迎する風もなく，それでいて拒絶する風でもない。上陸すると最初に首長格の男がやってきて，ガイドと何やら話をした。それから子供達が民芸品を持って集まってきた。以前に首狩りの習慣があったとされるが，大人たちは意外と物静かである。政府からシャツ，ズボンなど支給されているが，着ているのはシャツだけ。水上生活者には他の衣類は邪魔になるようだ。手芸，民芸品が唯一の収入源になっているという。

いつの間にか，陽が傾いていた。壮大な鳥の大群が河面を覆うように渡る。浮島の巣に帰って行くのだ。

ギアナ高地

ギアナ高地は，オリノコ河本流の源流の一つで，その面積120万㎢，世界最古の地層で，急峻なテーブルマウンテンとして残っている。

ギアナ高地探索の基地サンタエレナは，ラテン色の古風な町である。ここから山間部に入ったところにヤフコキャンプがある。ヘリコプターが発着する。ロッジ風のホテルはよく整備されている。海抜1500m，赤道近くでも意外と涼しい。　まわりにギアナ高地の異様なテーブルマウンテンが立ち並ぶ。これら卓上台地の海抜は3,000m前後，120以上の台地が雲海を突き破って立つ。垂直の断崖絶壁に囲まれて，軍艦のような陸の孤島である。この地形は今まで人も動物も寄せつけなかった。台地上に達することができるのは限られた登山家である。

私たちはヘリコプターで着陸することになっていた。ホテルからチャーターによって発着する。気象条件は悪い。絶えず雲が巻き，霧雨がかかっているので，飛び立つ確率は低い。私たちはラッキーだった。早朝，雲が湧かないうちに出発。パイロットは空軍経験者で有視界飛行，平原を30分飛ぶと，巨大な大岸壁が次々と展開する。荒涼とした溶岩湿原を超低空で飛ぶ。着陸地点は定まっておらず，パイロットのそのときの判断で決まる。奇岩怪石がまわりに立ちはだかって，月世界に着陸するようなもの。ガスの流れる中をあっという間に着陸した。

滞在時間は40分程の予定。あまり時間がない。プロペラは回転したままで気象条件によってはいつでも飛び立てる。

異様に静かな風景であった。鳥の囀りもない。樹木がほとんどなく，風のそよぎもない。動物の動く姿もなかった。ごつごつとした黒い岩は浸食され，その表面に腐葉物が堆積する。見渡す限りの湿原である。

岩上に巨大な葉を輪状に広げているのはアナナス科の空気植物。きれいな水の淀みには食虫植物ヘリアンフォラ，原始時代の残存植物。地下茎に補虫網を持つミミカキグサ。昆虫に寄生する冬虫夏草。腕のような塊根を横たえるアヤメ科の植物。目の覚めるような紅の花をつけるラン科植物。多肉質の葉を持つステゴレプシスはアフリカにも分布していて，地質時代両大陸が接続していたことを物語るという。岩肌に銀色の斑点を散りばめているのは，よく見ると地衣類であった。　この台地では4000種の植物が確認されている。そのうち75％がここだけの固有種。新しい種も次々と発見されている。生きた化石といわれる植物群である。　霧が流れ，視界が零近くなった。ヘリは大急ぎで飛び立った。ガスの上へ抜けるとまぶしいばかりの空。それから先の着陸は不可能になった。3，4日待っても乗れない日があるという。

もうひとつのハイライトはエンジェル瀑布。早朝4時ホテルを出発。平原をランドローバーで横切り，川岸からカヌーに乗る。エンジン付で急流を遡航。行先に異様な絶壁が姿を現し始める。台地直下のすごい奔流。木の葉のようにゆれ，投げ出されればおしまい。船縁を必死に握り，足をふんばる。ほとんどの人がこむら返りになった。

昼近く，遠い雲のあたりにエンジェル瀑布が見えた。岸辺に船を繋ぎ，急流につかりながら向こう岸に渡る。パスポートはビニールに包んで頭上に。ここから更にジャングルの急斜面を40分，テラス状の岩場に立つ。眼前の絶壁に壮大な滝がかかっている。

落差979m，世界最高の瀑布である。岩肌は茶褐色でまぶしく輝いていた。滝の落口には絶えず雲が流れ，なかなかその全景を見せようとはしなかった。他の大瀑布のような轟音を響かすことなく，意外と静かである。途中で空気を巻き込み，霧状になるからであろう。

なおこの滝のかかる大地はアウヤンプティと呼ぶ700㎢の広大な湿原台地である。

この瀑布は1935年飛行機によって発見された。世界の大瀑布の中でもエンジェル瀑布だけはめったに人を寄せつけない。今もって幻の滝である。

ギアナ高地にはエンジェルを始め，無数の滝がかかる。この水源はどこにあるのだろう。これ以上高いところがないのに不思議である。それは毎日のようにやってくる豪雨である。午後2～3時頃もの凄い水量が落ちる。頂上台地は皿状の無数の浅池で，腐食した堆積物が保水の役目をしている。これがコンスタントに滝に水を供給している。

おわりに

オリノコデルタおよびその源流のギアナ高地は圧倒的な迫力で訪れる者に迫る。太古の景観や自然が全く手つかずで残っている世界でも比類のない地域である。

ベネズエラ政府は自然保護に重大な関心を持っている。隣国ブラジルのアマゾン開発が奥地にまで及んでいるのとは対照的である。

ベネズエラは経済的にマラカイボ湖周辺油田に依存するところ大きく，南米諸国の中では財政的に恵まれてきた。国土の開発が差し控えられてきたのもこのことと無縁ではない。

しかし，近年石油価格の下落が続き，この国の経済に相当の打撃を与え，平価切り下げまで俎上に上っている。

隣国の先例が杞憂に終わることを願う。

写真１　オリノコデルタの一般的風景

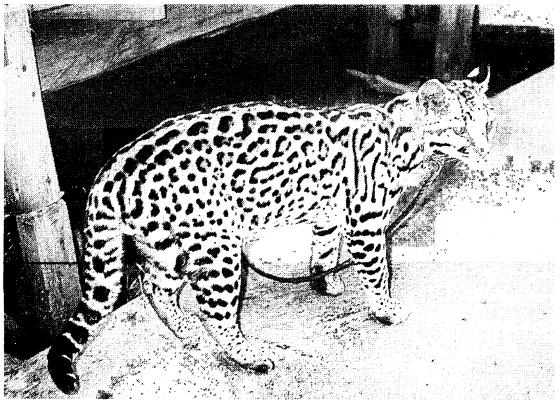

写真２　人気者ジャガーの仔

写真３　サンゴヘビの一種

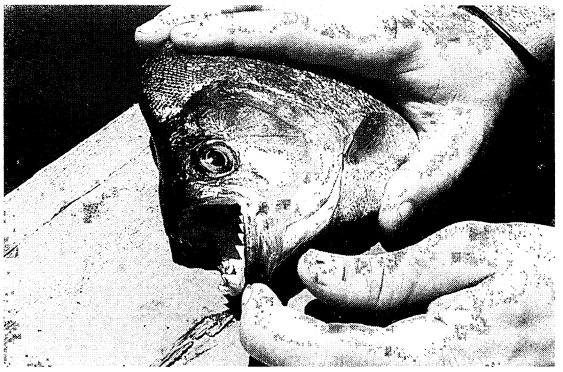

写真４　釣り上げられたピラニア

写真５　ワラオ族の水上集落

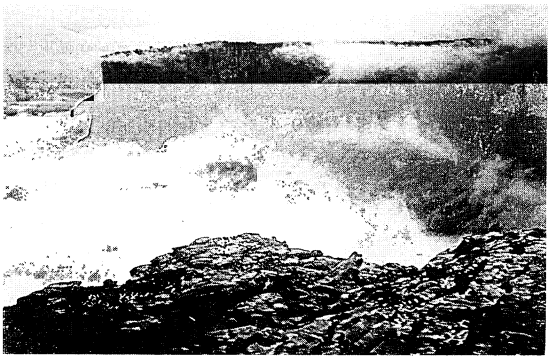

写真６　雲と霧の卓状台地

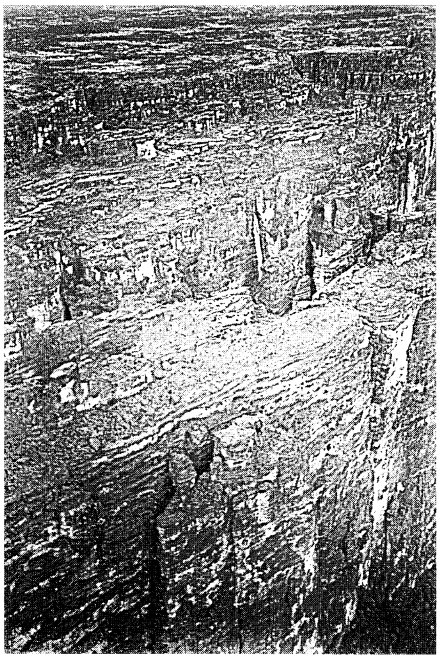

写真７　卓状台地には無数の滝が懸る

写真９　銀白色の地衣類

写真10　高地山麓の滝

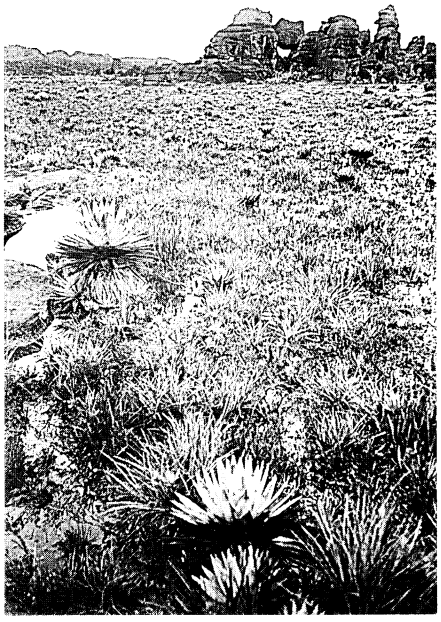

写真８　高地湿原の特異な植物群

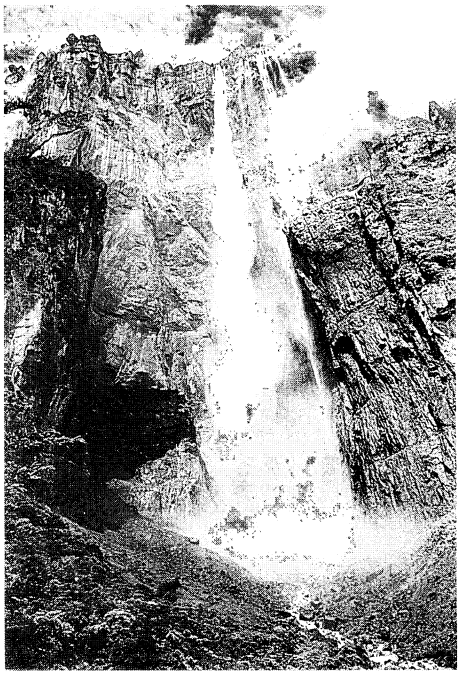

写真11　エンジェル瀑布